

辻村清行氏 | NTTドコモ 代表取締役副社長

携帯電話はグローバル競争の時代

夏モデルで国内初のAndroid端末を投入したNTTドコモ。こうしたオープンOS系端末を国内展開するとともに、従来の垂直統合型モデルのグローバル対応を進めていくという。

今年の夏モデルとして、米グーグルのAndroid OSを搭載した「HT-03A」が発売されました。端末の新たな方向性を感じさせますが、端末は今後どう変化すると思われますか。

辻村 AndroidやWindows Mobileに象徴されるオープンOS系の端末と、従来の垂直統合型ビジネスモデルの端末という2つの方向性を軸に進化すると予想しています。

HT-03Aはiモード機能に対応していませんが、オープンOS系端末にiモードメールが搭載されるまでにそれほど時間はかからないでしょう。ただ、iモードによるコンテンツの提供についてはダウンロードした音楽の著作権等をいかに保護するかという問題があり、時間がかかりそうです。また、「おサイフケータイ」のように日本だけの機能を載せるかどうかも検討しなければなりません。オープンOS系端末のローカル化といっても一様ではなく、難しい問題です。

一方、垂直統合型端末のミドルウェアは世界共通のグローバルアプリケーションと通信事業者に特化したオペレーターパックに分化することで、海外の通信事業者との連携が取りやすくなります。

つまり、グローバルな競争の世界

に入っていくこととなりますね。

辻村 垂直統合型モデルしかない時代に日本に参入したノキアやLGエレクトロニクスは大変でしたが、垂直統合型端末がグローバルアプリケーションとローカルアプリケーションに分かれれば、今よりずっと入りやすくなるはずです。グローバルアプリケーションは海外の主要な通信事業者と仕様を共通化するので、海外展開することもできます。

また、HTCのようにオープンOS系端末で日本に参入するという方法もあります。

NTTドコモではローカルとグローバルの両方に取り組むのですか。

辻村 国内の携帯電話加入者は1億余り、そのうちドコモの加入者は約5500万いるわけですから、日本のお客様向けにチューニングしたサービスを届けていく必要があります。ただ、国内向けにこだわっていると、海外で通用しないので、その兼ね合いが重要になります。

他方、オープンOS系は自由な世界で、アップルの「App Store」やグーグル「Android Market」といったアプリケーションストアには、世界中からさまざまなアプリケーションが集まっています。現在はApp Storeでも

まだ数万ぐらいですが、これから何十万というアプリケーションの中からユーザーが自由に選ぶようになるでしょう。

しばらくの間は垂直統合型モデルとオープンOS系がともに刺激し合い、進化していくはずですが、それだけAndroidやWindows Mobileのインパクトは大きいと考えています。

コンテンツ開拓が勝負

サービスでは「パーソナル化」がキーワードです。ユーザーに合わせた情報を提供する「iコンシェル」の今後の展開はどうなっていますか。

辻村 まず、いろいろなコンテンツの広がりが考えられます。コンテンツの数は現在300ほどですが、鉄道の運行情報や道路の渋滞情報など、どちらかというと都市指向です。地方ではもっと生活に密着した情報が求められているはずで、これからは地域ごとのコンテンツ開拓が勝負になると思います。

次に、クラウドコンピューティング型サービスとしての発展も考えられます。iコンシェルは現在、「電話帳お預かりサービス」をベースにしており、例えば電話帳に登録しているお店に関連した情報をプッシュ型で届けることができます。これからはサーバー側にもっといろいろな情報を蓄積し、ユーザーの属性に応じて配信することが可能です。